

山岸俊一先生を偲んで

山岸 俊一先生は、2022年2月14日、満88歳にて逝去されました。

山岸先生は当初は心臓血管系機能研究の、続いては神経イオンチャネル研究の第一線を担い続けられました。1960年に日本生理学会に入会されて以来、生理学会の発展、とりわけ生理学研究所（以下、生理研と呼ぶ）の創設に奮闘されました。それらの傍らで、登山、旅行、テニス、卓球、水彩画、短歌、俳句、篆刻など多彩な趣味を楽しみました。テニスでは、自分の周りに来た球はすべて受け止めて正確に打ち返されるというスタイルで、なんとなく終わってみればいつも勝ってしまっていました。私たち後輩には、いつもやさしく穏やかで、(テニスと同じように)すべてを受け止めて、時にはメモされたうえで、時をおいて対応いただける、信頼できる先輩でした。

そのような山岸先生に感謝の意を込めて、東北大学時代、生理研創設、そして生理研研究生活に焦点を当てた3部構成で書かせていただき、会員の皆様と共にご冥福の意を捧げさせていただきます。

「山岸先生と、私の大学院生時代」

鈴木裕一（仙台青葉学院短期大学特任教授）

50年前の仙台、東北大学医学部を卒業し第一生理学講座の大学院に入学した私は、そこで助教教授をされていた山岸先生（山岸さん）と出会った。丹後半島での実験にも連れて行っていただいた。北海道の大雪山の縦走もご一緒した。その頃の私は指導教官の故星猛先生の元で試行錯誤を繰り返し、まだまだ迷いの中にあっただと思う。そんな状況の私にとって穏やかな人間性を持つ山岸さんは兄貴の様な存在だったかもしれない。山岸さんは、自身の経験と、多彩な生理学者との交流を通じて、ヒトの行う研究活動（サイエンティスト）の深い



動機を体で理解していた様に思う。また丹後半島では実験を行うのに地元の人達の協力を得る活動も見た。私は山岸さんに接することで、著名な生理学者も身近で人間臭いということ、研究活動が個人の知的欲望に基づくものであると同時に社会の中での活動でもあることを、知らず知らずの内に学んだのだと思う。私はいつの間にか生理学者として夢中でまたやりがいを感じてやることができた。今になって思える。若い自分が山岸さんと出会えたことはかけがえのない幸運であったと。山岸先生、ありがとうございました。

「生理学研究所創設と山岸先生」

岡田泰伸（生理学研究所名誉教授）

生理研の設立は、山岸先生ご自身が日本生理学雑誌69巻4号の「生理学研究所の歴史（前編）」で書かれているように、そもそも日本生理学会での熱い議論から出発しています。当時のわが国の生理学研究室と欧米とのあまりにも大きな差を打開するための方策を見出すべく、本学会内に生理

学振興委員会が1958年に設けられ、その中で山岸先生ら若手グループの有志が専門委員会を作って、大型設備を導入し全国的共同研究を推し進める場の必要性を訴えた。それにより、1965年5月に本学会に将来計画委員会が置かれ、1967年5月に最初の「生理学研究所案」が発表された。その後いくつかの改訂がなされ、1967年10月の学術会議総会で「人体基礎生理学研究所（仮称）の設立について」の勧告が採択され、その下に生理学研究所設立準備委員会が1968年に立ち上がり、山岸先生はその中の業務専門委員の一人として多くの資料作成に携わられ、1973年10月に学術審議会からその設立の喫緊性が文部大臣に報告された。その結果、1975年に生理研を含む3研究所で構成される「岡崎基礎総合研究所（仮称）の調査会議」が置かれ、山岸先生はその調査協力者に任じられた。翌年には、その設置のための調査室が置かれ、山岸先生は（分子科学研究所教授併任の形で）その次長に任じられた。そしてついに1977年に生理研が設立され、内菌耕二所長と山岸教授のお二人が最初に発令された。その結果、山岸先生は生理研実質化のための1977年度概算要求に向けて、研究組織・設備・定員・（研究施設、共同研究者宿泊施設、職員宿舍の）建物計画などの作成を一手に引き受けられました。ご自身は「生体膜研究部門」を担当されて研究に取り組まれるとともに、その後設立された総合研究大学院大学の教授として大学院生教育にも当たられました。また、以前からヤリイカ巨大神経軸索実験に出かけられていた伊根町に、地元の漁師や役所の方々との折衝を重ねられ、生理研実験動物施設分室という形で伊根実験室の開設を1986年に実現されました。1999年に停年退職後もお一人で、そして2007年に生理研に点検連携資料室が設置されてからは村上政隆先生にボランティア協力されて、生理研創設とその後の発展過程の資料・史料の収集・整理・データベース化に当たられ、それらは2016年に改組されたアーカイブ室にデジタル化されて保管されることになりました。このように、本学会の念願であった生理研創設の実現とその後の発展は、山岸先生のご尽力なくしてはなかった

ものと言えます。本学会員および生理研OBの一人として生理学会員の皆さんと共に山岸俊一先生に深く感謝申し上げるとともに、哀悼の意を表したいと思います。

「生理学研究所と伊根実験室での研究と山岸先生」 「山岸先生と伊根」

久木田文夫（元生理研助教）

山岸先生との最初の出会いは、丹後半島の先端にある伊根漁協加工場の倉庫であった。東大物理の大学院生の私は指導教官に紹介され、東京医科歯科大学生理学教室の竹中敏文先生の下で電気生理学の技術習得中であった。1972年冬、私は竹中先生に連れられ、伊根を訪ねた。東北大学医学部生理学教室の山岸先生も、実験機器を乗用車に積んで伊根に来られた。全く別々グループとして、ご一緒したのだが、伊根の実験施設では、狭い倉庫で実験を行い、宿直室で雑魚寝する生活が続いた。短期間であったが山岸先生の飄々とした人柄に触れることができた。後日、両先生の間を知ることになった。「神経活動に対する蛋白質分解酵素の作用」（竹中・山岸、1968）は「イオンチャネルが蛋白質であること」を初めて明らかにした論文である。この仕事は山岸先生が東京医科歯科大学の助手時代に東大三崎臨海実験所で行われた。竹中先生が横浜市立大学に栄転される際に、イカの実験は「山岸さんに習ったら」と言われた。その直後、山岸先生が竹中先生の後任として生理学教室に異動して来られた。かくして山岸先生の指導の下、イカの実験が始まり、「イオンチャネルに対する溶媒粘性の効果」の仕事がスタートした。山岸先生は国立生理学研究所設立の為の活動に若手として参加されていた。山岸先生が岡崎の研究所設立準備の調査室付教授に昇進され、私の知ることになった。学術振興会奨励研究員が終了後の就職先の相談をしたら「イカの実験を続けるのなら」と、生理研技術課教官を勧められた。実験は相変わらず、伊根漁協加工場で行った。今度は古家喜四夫氏や大平仁夫技術課長らと共に、研究所のトラックで大量の荷物を運んで現地の実験室を立ち上げた。大きな進歩はイカを屋内タンクで飼

育できたことと空家を借りて宿泊できたことである。岡崎の生理研研究室と伊根の実験室との差に皆悩んでいた。常設設備を備えた自前の建物の必要性を感じ、伊根漁協や伊根町と長期間相談を続けていた。山岸先生の粘り強い交渉と「新しい物を創る」ことへ熱意が実を結び、1986年に集落の端に動物研究施設伊根実験室が建てられた（2012年終了、現在更地）。山岸先生のご冥福をお祈りしながら、活気ある昔日を懐かしみ、イカ実験の経緯を述べた。

「Road to My Way～伊根臨海実験所への道行」

筒井泉雄（東京大学農学部特任研究員）

生理研を13時に出て、岡崎インターに入ると、次の休憩は、14時過ぎに長浜サービスエリア、ここでお饅頭を一つ。木之元インターを降りて、賤ヶ岳の南を琵琶湖沿いに走り、箱館山スキー場を右手に北西に上り鯖街道を抜け、上中、芭蕉寺を右手に小浜に入る。小浜から、海沿いを一気に舞鶴まで走る。由良川を越えて川を下り、河口から再び、海岸沿いを西へ。今度は宮舞線とタンDEMとなる、時間は16時に近い。この間2度、甘いものを口にする。宮津ないしは天橋立で小休止し、あとは一気に伊根の実験所を目指す。到着は夜8時ごろ。7時間の長旅である。山岸先生のエネルギー消費はほぼ一定で、少ししか召し上がらない（れない）分、回数を的確にこなしておられたことが懐かしく思い起こされる。休憩を的確にとり、エネルギー補給をしながら、毎回どのように7時間を切るかに腐心されていたことが懐かしい。的確に仕事をこなしていく中に、ルーティンと異なるものを忍び込ませ、日々の繰り返しを新鮮なものとして積み重ねてゆく。達人が垣間見られる時間であった。ルーティンから進化を紡ぎだしてゆく「マイウェイ」を実践された先生の人生的一幕である。

「山岸先生との思い出」

古家喜四夫（名古屋大学医学研究科研究員）

山岸先生に初めてお会いしたのは、旧愛知教育大の図書館に設立されたばかりの生理研の一室を

訪ねた1977年6月のことでした。物理学科を卒業し生物工学科でポスドクになっていた、生理学とは何かを全く知らなかった私を雇っていただきました。最初は「なぜ？」と思っていましたが、後々に山岸先生の生理研あるいは生理学に対する将来のビジョンに沿っていたことを理解しました。まず思い出されるのは久木田文夫氏も書かれている、伊根実験室ができる前のかび臭い漁協加工場一室でのヤリイカの実験と生活です。こたつに入り電気毛布に包まりながら研究を含めいろいろな話をしました。山岸先生は人の話をよく聞かれ、決して自分の意見を押し付けることなく私たちの発想を大事にしてくださいました。多忙な研究所全体の仕事の合間を縫って雪をものともせず1日ばかりで車を飛ばして来られ、生き生きと実験に動んでおられた姿が今も目に浮かびます。早くから細胞内Ca²⁺の役割に興味を持たれて自身はヤリイカ巨大神経にこだわって研究を進めておられました。研究所としては細胞内Ca²⁺測光装置やコンフォーカル顕微鏡など当時最先端の機器の導入など、いつも大きな視野を持って研究所の運営に当たられ、今に至るイメージング生理学のきっかけを作られたように思います。次に思い出されるのはテニスを通したたくさんの人との交流です。研究室間の風通しも自然によくなっていました。勝ちにこだわられるテニスは意外でした。その他、ご家族とご一緒した安曇野の別荘や乗鞍のスキーなどなど、今も心に深く残っています。語りつくせない感謝の念でいっぱいです。本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈り申しあげます。

山岸俊一先生 略歴

- 1933年4月28日 宮城県白石市に生まれる
- 1958年3月 東北大学医学部卒業（医学士）
- 1963年3月 東京大学大学院生物系第一基礎医学課程修了（医学博士）
- 1963年4月 東京医科歯科大学医学部助手
- 1967年9月 ニューヨークコロンビア大学医学部研究員
- 1969年12月 東北大学医学部助教授

- 1973年4月 東京医科歯科大学医学部助教授
1976年4月 岡崎基礎総合研究所調査室次長, 分子科学研究所教授 (併任)
1977年5月 岡崎国立共同研究機構生理学研究所教授 (生体膜研究部門担当)
1988年4月 総合研究大学院大学教授 (併任)
1995年4月 総合研究大学院大学生命科学研究科長 (併任)
1999年3月 自然科学研究機構生理学研究所停年退職
1999年4月 自然科学研究機構生理学研究所名誉教授
2022年2月 逝去

(とりまとめ責任者 岡田泰伸, 古家喜四夫)